

学校法人 佐藤栄学園

平成23年度 栄東中学校入学試験問題

東大クラス選抜Ⅰ (国 語)

受験 番号	
整理 番号	
氏 名	

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。

2. 試験開始の合図があったら、問題用紙と解答用紙のどちらにも**受験番号**と**整理番号**と**氏名**を必ず記入してください。

3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で12ページあります。ページ数を確認しましょう。

4. 答えは、すべて**解答用紙**に記入してください。

5. 印刷のはっきりしないところなど、質問事項があったら、だまって手をあげて
かんとく
監督の先生に聞きましょう。

6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。

7. 試験が終わったら、**問題用紙**と**解答用紙**は別々にして、整理番号順に監督の先生
の指示にしたがって提出してください。

【一】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、すべて句読点などの記号も字数にふくみます。

大学で「言語はなぜ生まれたか」というテーマでレポートを課せられたとき、学生の多くはとまどっているように思われた。言語がコミュニケーションのために生まれたのは、自明のことではないかといったげな顔をしている学生がたくさんいた。むしろん教授がレポートのテーマにしたのは、それが自明ではないからだだった。

ひとがひとと交流するときの手段として言語が重要なことはいうまでもない。しかし、コミュニケーションのために言語が生まれたというのは、¹原因と結果を取り違えているのではないかという指摘もある。そう指摘する人々は、言語の第一【1】は意思伝達ではなく概念化にあるという。たとえば、こういうことではないかと思う。人が草原で茶色いたてがみをもった牙のするどい猛獣に出会う。そのときは、命からがら逃げた。また別の日、別のところで猛獣に出会う。先日、²の獣とよく似ているがもう少し小さく、たてがみが短い。この前の獣と同じくこちらに近づいてくるので、恐ろしく逃げた。そういえばもっと大きな奴が人を食っているのを見たことがある。こういう経験を繰り返して、大きさも色も性質も脚の速さも少しずつ違うこの獣に名をつける。これを「ライオン」とよぼうと。そして、この「ライオン」にはどれくらいの危険性があって、どういときは比較的安全かを知り、そばに来たときはどう対したらよいかなどということを決めていく。そうしておかないと、少しずつ違う獣にそれぞれ対応して、そのつど深手を負ったり、場合によっては命を落としてしまったかもしれない。この場合、個々の異なる獣を概念化して「ライオン」という名をつけるところが決定的に大事で、命の存続に関わってくる。人が言語をもつようになる第一の理由は、ここにあるのではないかということである。自分以外のものに「きのう、あそこにライオンがいたから今日もいるかもしれない。気をつけろよ」というのは、そのあとの話で、概念化した言語がたまたまコミュニケーションにも適していたということである。【2】、この場合、伝える側の概念と相手の人の概念が違っていたりすると、かえってとんでもない誤解を生むことになる。言語でコミュニケーションしない方がよかったということもありうるだろう。世の中にあるものを概念化して把握することは、人間という生き物が生きていくための根源的な条件の一つであるというわけである。

生まれてからの赤ん坊にとっても、概念化を通して世界を理解していくということが重要な発達課題である。泣き声で人をよぶ状

態を通り抜けると、アーアーというつぶやきから始まって、ママとマンマを区別し、さらにママとそれ以外の人間（パパとかバアバとか）、マンマと食べ物以外のものを見分けていく段階へと進んでいく。食べ物以外の動くものはすべてブーブ、ブーブといっている中で、ほんとうにブーブとよべばよいものと、ワンワなどよんだ方がよいものがあることを知っていく……。そういうことを数かぎりなく繰り返して、子どもは自分のまわりにある世界を分別し概念化し、世界を理解していくのである。その分別のあり方、概念化のあり方は、親をはじめとした大人によって教えられる。子どもの世界観が、大人の文化の影響の下で決まっていくものであることはいうまでもない。こうして習い覚えた言葉を母語という。母語によって習得した世界観は、絶対的なものではないにせよ、その後のその人の世界観に大きな影響を与えていくことになり、その人の思考に強い影響を及ぼすことになる。単純化して示したが、母語を習得するというのは、つまりそういうことである。

外国語の習得は、そういうことではない。多くの場合、そのような世界観の習得を意味しない。外国語を通して外国語の世界観を習得するのではなく、母語の世界観との照らし合わせの中で外国語の世界観の特徴を知っていくことになる。それも、母語と外国語の世界観がかなり異なっているところを中心に限定された部分だけのことである（そのこの意味は、決して小さくはないが……）。全面的に、【3】根本的な部分まで外国語の世界観への理解がおよぶ人は、よほど深く、長期間その言語に親しんだ少数者だけではないかと思う。【4】、それでよい。繰り返すが、外国語の習得は世界観の習得のために行われるのではないからである。では、何のために外国語を学ぶのか？ コミュニケーションのためである。別の文化を持った人たちと意思伝達をするためである。異文化間のコミュニケーションの必要性は高くなるばかりであるが、そこには言語の壁が立ちはだかっている。この壁を低くする努力は必要であろう（そうならないように思われるが、本当は双方向で必要だろう）。

（村上慎一『なぜ国語を学ぶのか』より）

問一 【1】にあてはまる最も適切な漢字一字をあとから選び、記号で答えなさい。

ア 理 イ 利 ウ 論 エ 義 オ 念

問二

2

4

にあてはまる言葉として、最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ たとえば ウ ただし エ ところで オ しかし

問三

——線部1「原因と結果を取り違えている」とありますが、作者が考えるコミュニケーションと言語との関係はどのようなものですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 言語があることでコミュニケーションがしやすくなった。

イ 言語が生まれたことで、コミュニケーションが可能になった。

ウ 言語が生まれたことで、かえって誤解を生みやすくなった。

エ 言語は概念化してはじめてコミュニケーションを可能にした。

オ 言語はコミュニケーションではなく、概念化のために生まれた。

問四

——線部2「概念化」とはどういうことですか。ライオンを例にして六十字以上、七十字以内で答えなさい。

問五

——線部3「母語によって習得した世界観は、絶対的なものではない」とありますが、なぜですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア ものところがつく前に習得した世界観は、成長とともに変化していくから。

イ その人の世界観はその人独自のものであり、すべて正しいとはいえないから。

ウ 子どもの世界観は大人になって外国語の世界観に触れて影響を受けるから。

エ どういう文化のどういう大人に教えられたかで、世界観に違いがでるから。

オ 母語による世界観は、外国語の世界観に触れて影響を受けるから。

問六

——線部4「そういうこと」が示す内容として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 段階を経て徐々に概念化を築き上げていくということ。

イ 段階を経て徐々に世界観に影響を及ぼすということ。

ウ 自分に関わる人の世界観や思考に影響を及ぼすこと。

エ 母語の持つ世界観や思考に強い影響を受けること。

オ 外国語の世界観を習得する段階のひとつだということ。

問七 ー線部5「母語の世界観との照らし合わせの中で外国語の世界観の特徴を知っていく」とありますが、どういふことですか。

次の文に続けて空欄を埋める形で、五十字以内で答えなさい。

日本語の「らくだ」にあたるアラビア語は、雄か雌か、単体か群れかなどによってすべて異なる単語になることから

問八 次のア～カの文を読み、本文の内容に合うものには○を、まちがっているものには×を解答欄に記入しなさい。

ア 言語はコミュニケーションのために生まれたと考えていたのは昔のことだと大学生の多くが思っている。

イ 人がものに名をつけるのは命を存続させるためである。

ウ 世の中のことを概念化して理解することは、人が生きるための重要な条件である。

エ 大人が世界を分別化、概念化する方法を伝えることで、子どもは母語を習得する。

オ 母語と外国語の中心的な部分を比較することで、少数の者は外国語の世界観を理解することができる。

カ 異文化間のコミュニケーションは、相互の世界観を尊重することから始めるべきだ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、すべて句読点などの記号も字数にふくみます。

家は古かった。造りも少しいびつだった。でも、いつもよく片づけられ、丁寧に整えられていた。窓には曇りひとつない。廊下は黒光りしている。そしてあちこちに小さな花が活けられている。私たちが生まれた頃からずっと窓は磨かれ、廊下は拭き込まれ、花は活けられ続けてきたのだろう。それに気がついたのは、だけど、最近のことだ。

この春の朝だった。階段を降りきったところの小さな台に花が置かれているのに気づいた。何か特別なことがあったわけではない。

朝、起きて、階段を降りた。いつも通りだ。階段の下に李朝の花台があるのは知っていた。青磁の花瓶もずっと家にあるものだ。花は、鉄線と都忘れだろう。だけど、その朝は何かが違っていた。何が違うのか、わからない。ただ、花が目飛び込んできた。

おはよう、と台所に向かい、すぐに訊いた。

「おかあさん、あの花」

母は振り返って微笑んだ。

「なあに」

「ささ、今日ははぶ茶、たまにはいいよ」

祖母が湯呑みを手渡してくれる。

「なんか、花が」としか私は言えなかった。花の何がどうしたのか、自分でもわからなかった。でも、花がそこにある、と思ったのだ。花がそこにあつてうれしい、と。

「花がね」と言い、あとは黙ってお茶を飲んだ。母も何も言わなかった。

その朝から、いつも花がある、ということに私は目を留めるようになった。花は、よく見るとどれもすごく可憐だった。

「おかあさんでそのへんの花を適当に活けてるだけなのに、センスあるよね」

私は七葉に言った。

ちようにと祖母が遊びに来ていて、私たちと一緒にイマでお茶を飲みながら夏場所を見ているときだった。この祖母は母の妹だけど、

母よりひとまわり大柄だ。結婚して近くに住んでいる。子供はなく、だんなさんはしょっちゅう出張に出てしまうので、ときどき家に遊びに来る。店にすわってくれたり、私たちの話し相手になってくれたりもするし、ただばうとお茶を飲むだけのこともある。その叔母が、あら、とテレビから振り返った。

「適当に活けてるんじゃないわよ。適当に見せてるだけよ、型通りよりよっぽど難しいのよ」
「なんで」

「なんでって、きちつと型にはまったような花が飾ってあったって面白くないでしょ、自然に見えて完成されてる、それが里子ちゃんの技なの」

私は七葉と顔を見あわせた。

「おばさん、おかあさんのことずいぶん持ち上げるね」

あら、と叔母はもう一度言った。テレビではちょうど今日の結びの一番が始まるところだった。

「あんたたち、もしかして、知らないの？」

「知らないって、なにを」

叔母は画面に目を戻し、しばらく土俵の成り行きを見守ってから、またこちらを向いた。

「ほんとと葉っぱ一枚の裏表まで考えて活けてあるはずよ。里子ちゃんはお花のお師匠さんだったのよ」

そう言ってクッキーの缶に手を伸ばし、画面を見て、あらあーと声を上げた。あっけなく負けちゃったわねえ。それから、立っていつてテレビの電源を切った。電源から切ったらリモコンを使えなくなると何度言ってもこの叔母は同じことをする。

ソファに戻った叔母によれば、母は若い頃、華道も茶道も熱心に習い、たいそうな腕前だったということだった。

「いいところまでいったのよ、まあ、お花に限らず里子ちゃんなんでもできたからね」

「へーえ」

七葉と私は同時に言った。叔母は、あらあら、と笑う。

「あんたたち、ほんと息が合ってるのねえ」

私は曖昧にうなずく。同じ言葉を発しながら、七葉と私の気持ちはずいぶん違っている。七葉はきつと母を見直している。私も母を見直しているのだけど、七葉とは反対側をなぞっている。軽く失望している。母に、ではなく、母の過去形をとって現れたたぶん自身の未来形に。叔母はさらに話を聞きたがる七葉の目をのぞきこむようにして言う。

「あんたたちのおかあさんはそりゃあかつこよかったのよ」

七葉がうれしそうに笑った。私はやっぱり過去形に気を取られている。かつこよかった、っていう過去形に。

「小さいリユウハだけどね、里子ちゃんはイエモトから目をかけられてたのよ」

叔母が言う。ところが今や叔母のほうが華道の師範なのだ。自宅でも教えているし、カルチャースクールでもクラスを持っている。

「おばさんのほうができたんだね、結局は」

私は□言った。そういうことにおいてはしなかった。

「そんなことないわよ、あたしはいつだって里子ちゃんの次。勉強だって、運動だって、なんにもかなわなかったんだから」

叔母は事もなげに言って、泉屋のクッキーをひとつつまんだ。

「これこれ、この菱形の好きなのよあたし」

「おかあさんは」

「里子ちゃんはジャムの入った、これでしょ、昔っから」

「クッキーじゃなくて、お花。いいところまでいったのに、どうしてやめちゃったんだらう」

七葉が無邪気に訊いた。私は聞きたくなかった。この話、なんだか嫌な感じがするのだ。

「結婚したからよ」

「結婚だったら、おばさんだってしてんじゃない」

「そりゃ結婚だったっていろいろあるわ、相手によるし、そうね、相手にもよるし……そうねえ、相手によるのよ」

それから慌てて付け足した。

「泰郎さんが悪いんじゃないのよ、ほら、早かったからね、里子ちゃん、結婚が。あたしとは十年違ったもの、十年あればたいがい

のことは追いつくもののよ、素質に差があったってね」

フォローが決まったと思つたらしい、叔母は満足そうにお茶を飲む。

「結婚したら終わりにしなくちゃならないの？」

「あら、だからそれは相手に……や、それは本人の気持ち次第よ。里子ちゃんの場合はすぐに赤ちゃんができたからね、お茶やお花より麻子ちゃんたちのほうが大事だったでしょうよ」

つまり母は結婚して私たちが生まれたからやめたということだ。

「しあわせだったのよ、それだけ」

嫌な感じはテキチュウした。叔母がマガオでしあわせだという、私たちが含まれる集合のほうへ里子ちゃんは潜り込んで姿を消してしまう。そこに里子ちゃんのしあわせはあったんだろうか。磨いたものも、熱くなったものも、輝いたものも、一緒に飲み込んでしまつて、それでもいいと思えるようなしあわせが、あるんだろうか。

「考えたくないや」

思わず声に出してしまう。七葉が楽しそうに言う。

「おかあさんってすごかったんだ」

だから、過去形を使わないでほしい。おかあさんじゃなくて里子ちゃんがすごかったのだ。

「そうよ、あんなに早く結婚しちゃったのがもったいないくらいよ。あんなたち、おかあさんを敬いなさいよ」

叔母がふざけて言う。

大好きな人。かけがえのない人。私たちのしあわせにとつてなくてはならない人。明るくて、歌がうまくて、（いつも何かしら口ずさんでいる）、ものすごくおいしい筑前煮をつくることができ、モーツァルトが好きで、字がきれい。おかあさんはおかあさんとしてすごいかもしれない。でも、すごかった里子ちゃんとは別人のように思える。

「大雑把で鈍い感じ」

「なにが」

「しあわせ、って」

叔母は笑う。なに言つてんの、麻子ちゃんは。七葉は笑わない。ちよつと黙つて考えてるような表情を見せる。しあわせのいろいろな種類について私は思いをめぐらせる。好ましくないしあわせというのも、きつとこの世にはあるのだ。しくみのようなものの存在がおぼろげながら意識できる。この世がまるしくみとか、人がしあわせになるしくみとか。

「地球ってさ」

私はぼんやりと浮かんだ絵のことを口にする。

「誰かが支えてるんだよね」

叔母が眉を寄せる。

「どしたの急に」

「球じゃなくて、平たくつてさ、端っこまで行ったら滝になってさーざー流れてるお皿みたいな地球のこと」

七葉が、ああ、という顔をする。

「ギリシヤ神話だね。巨人が足を踏ん張つて地球を支えてる」

「そう。その端っこの行き止まりみたいところ」

「なに、なんの話」

叔母が怪訝そうに、でも笑いを含んだ声で訊く。

「結婚」

なに言つてんのよ麻子ちゃんは、と叔母が笑つて繰り返す。中学生って青いね。叔母が笑い、七葉が私を見ている。なんだか、世⁸界⁷つて思つていたより狭い^{せま}のかもしれない。どこまでも行けると思つていたけど、違うのかもしれない。

問一——線部 a、e のカタカナを漢字に改めなさい。

問二——線部「里子ちゃんはジャムの入った、これでしょ」を意味が通じるように、主語を明確にし、言葉を補って書きかえなさい。

問三——線部 1「いびつ」の意味として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア せまくるしい様子
- イ みすばらしい様子
- ウ 黒ずんでいる様子
- エ ゆがんでいる様子
- オ がつしりしている様子

問四——線部 2「夏場所」の指す内容を答えなさい。

問五——線部 3「持ち上げる」とはどういう意味ですか。五字程度で答えなさい。

問六——線部 4「知らないの？」とありますが、何を知らないのでしょうか。二十字以内で答えなさい。

問七——☐に入る言葉として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 慎重に イ さびしげに ウ 気楽に エ 朗らかに オ 悲しげに

問八——線部 5「この話、なんだか嫌な感じがするのだ」とありますが、なぜ麻子は「嫌な感じがする」と思ったのですか。五十字以内で答えなさい。

問九——線部 6「そこ」とは何ですか。具体的に一語で答えなさい。

問十——線部 7「青い」とは、ここではどういう意味ですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 柔軟である
- イ 冷静である
- ウ 将来性がある
- エ さわやかである
- オ 未熟である

問十一——線部 8「世界って思っていたより狭いかもしれない」と思ったのはなぜですか。三十五字以内で答えなさい。

問十二——線部「この春の朝だった。ただ、花が目飛び込んできた。」について、麻子の何がどう変わったのか、十五字以内で答えなさい。

解
答
用
紙

氏名

整理番号

得点

[illegible][illegible]